



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 宛先の無い「告白」が誤配される時：絲山秋子「沖で待つ」をめぐって(fulltext) |
| Author(s) | 疋田,雅昭 |
| Citation | 東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I, 67: 110-97 |
| Issue Date | 2016-01-29 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/140076 |
| Publisher | 東京学芸大学学術情報委員会 |
| Rights | |

宛先の無い「告白」が誤配される時…

絲山秋子「沖で待つ」をめぐって

「沖で待つ」は、『文學界』（二〇〇五（平成一七）年九月号）に掲載され、第一三四回芥川賞を受賞した小説である。今日に至るまで本格的な論考は存在せず、芥川賞受賞時の選評が、僅かに当時の読みを伝えるのみである。

河野多恵子（『沖で待つ』の「新しさ」）（『文藝春秋』二〇〇六（平成一八）年三月号、以下選評は同出典）は、「職業（生活の資を得るための仕事）を見事に描いた小説（中略）現代の本式の職業をこれほどまでに自由に書きこなした『沖で待つ』の新しさには瞠目する。」として、その現代の職業小説としての成功を賞賛する。

また、宮本輝の選評（「安定感」）も「最初と最後にファンタジー仕立てを持つてくる手口にさして意味があるとは思えない」としながらも「何年も実社会でもまれた人しか持ち得ない目が随所に光っている」点を評価する。

一方、「私」と「太」との関係性に注目した評として山田詠美（「選評」）は「友人でもなく、恋人でもなく、同僚。その関係に横たわる茫漠とした空気を正確に描くことに成功している。」と述べる。池澤夏樹（「恋愛でない男女の仲」）の「この作の要点は恋愛ではない女と男の仲である。」との評もそれに重なるところだし「今回の作でこの二人の仲を描くのに力あったのは彼らの職場の生き生きとした記述だ。」としてやはり職場環境の描写を評価している。

これらの評言を集約的に述べるものとして黒井千次（女と男の新しい光景）

の評がある。

短さの中に必要かつ十分な内容を盛り込んだ秀作である。「中略」女性総合職の出現によって女と男の対等に働く場が生まれた。それは新しい現実である。その新しさがいかなる意味を持ち、どのような可能性を人間にもたらしたかを追求したのが本作であるといえよう。ここに見られる女と男の間にあるのは、恋愛感情でもなければ単なる友情でもない。仕事の中で灼熱する生命の閃光を共有することによって生まれた新しい関係である。しかも二人が男と女であるために、一見遠ざけられたかに見える性の罅（こだま）が微かに響き返してくるところにも味わいがある。なによりも仕事の現場感覚が人物を支えているところに作の強みが宿っている。

総じて、職場環境とそとの男女の新しい関係性についての描かれ方にその評価は注がれているようだ。本論もそうした観点からテキスト全体を時代の反映として詳細に読み直した一面がある。

しかしながら、この読み方では、テキスト全体を支配しながらも決して浮かび上がってこないある問題系を取りこぼしてしまふ。それらは、「記憶」「記録」「告白」「伝達」といった古くて新しい問題なのだが、実はこうした問題系をこ

疋 田 雅 昭*
（日本語学・日本文学分野）

*東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野（84801 小金井市貫井北町4-1-1）

のテキストで検討するためには、先行論で指摘されたような、新しい「職場感覚」と「恋愛ではない女と男の仲」という問題を一度充分突き詰めた上で、それを相対化しようとするテキストの力動を読み込まなくてはならない。

ひとまず、テキストの構造から検討してみよう。

1 宛先の無い「告白」あるいは構造的なテキスト

「しゃっくりが止まら、ないんだ」

牧原太は靴下のまま玄関に突っ立って情けない顔をしていましたが、考えてみればもとから彼にはそういう少し困ったような顔つきが似合っていたのでした。(57頁)

語り手は、です、まず調の敬体で物語を語る。「もとから……いたのでした」という語り方から、語りの現在が事後的であることだけはわかるが、実際には語りの現在が最後まで明確に示されることはない。

二カ所の「* *」に挟まれた箇所が物語の中心であり、就職し福岡に転動になってから埼玉に移るまでのいきさつが語られる。だが、中心部を省いた「* *」前後は、語りの時間としては連続しているように読める。つまり、全体としては、B1↓A↓B2という構造を有しており、全体を統括する語りの現在が明確でないことから、Bのレベルは現在進行形の様にも読め、そのBのレベルからAが語れていると読める。しかし、「* *」に挟まれたBの語りもAと同じ水準の文体であるためすべてが事後的な出来事として語っているようにも読めてしまい、結局Bをすべて統括できる語りの現在がテキストの外部に想定できるように思えてしまう。

読者のこうした感覚は、おそらくこの敬体による語りの影響が大きいと思われる。語り手と及川が同一人物であると仮定してテキスト内の会話を鑑みれば、語り手は日常会話に敬体を使用しているわけでもなく、敬体の使用は意図的であると考えられる。また、作家論的に考えても、「勤労感謝の日」(『文学界』二〇〇四(平成一六年)年五月)などでは常体を採用しているのに、この文体は作家の書き癖であるわけでもない。

五反田に行く予定なんかなかったのです。さいたま市に住んでいる私にとっては、普通なら用事のない場所です。前の晩、私は目黒の友達に送別会をやってもらって、彼女の出勤と同時に家を出たのですが、地下鉄に乗る彼女と駅で別れて山手線のホームに立ってはじめて五反田が隣駅だったことを思い出したのでした。転動で来月の初めには浜松に行ってしまう私は、今を逃したらもう五反田に行く機会もないだろう、と思いました。最後に一目、太っちゃんの部屋を見ていきたくなくなったのです。(57頁)

先の引用に続くこの部分も、五反田のアパートに行ったあとにその事情を語る構造になっているので、時間的には倒錯している。ここで、現在は「埼玉」に住むが近く「浜松」に転動することになっている語り手の現状が明かされるが、続く「* * *」以降、急に時間をさかのぼる構造になっているため、再び「* * *」という同じ記号が明示されるまで、その情報の理解は一端宙釣りにされてしまう。

「さいたま市」は、二〇〇一年五月一日に、浦和市、大宮市、与野市の合併によって誕生する政令指定都市であるから、語りの現在の下限が初出時の二〇〇五年九月からおよそ四年半の間になることが理解される。副島さんの転動が「バブル崩壊の頃」(78頁)だから、一九九〇から数年間として、その翌年に語り手自身が転動している。太っちゃんと東京で再会したのは「何年もたつてから」(83頁)であり、ここでは「典型的な三〇代の会話」が練り広げられる。

大学卒業後すぐに就職したと考えられる太っちゃんと語り手は、当時二二〜二三歳。さいたま市への転動前に「コンピュータが営業所に導入され」て、その「OS」が「開発されたばかりのもの」(77頁)であったことから、ウィンドウズ95または98でCADを使用している可能性が高い。

バブル景気が、一九八六年〜一九九〇年頃までだとして、その間に二二、二三歳で就職、バブル崩壊と職場のコンピュータ化を経験し、ゼロ年代にさいたま市で三〇代に入っていると考えると、一九六〇年後半頃に生まれた世代の物語であることがわかる。

作者の糸山秋子が一九六六年生まれなので、INAX入社が一九八八年とな

り、この点では物語中の語り手の設定範囲と一致する。が、絲山自身は九八年に小説を書き始め二〇〇一年に退職しているの、物語の語り手は、執筆当時の可能性としての作家の現在を示しているとも言える。

だが、作家の実生活がどうであれ、これまで確認してきた物語に記載されている年月からは、もう少し幅のある年代に対する普遍性が確保されていると言つてよいだろうし、この物語は、こうした作家論的な知識を超えた時代の痕跡が巧みに刻み込まれている。

2 断絶としての「起点」あるいは現実と接続するテキスト

見ていると、ふうつとタバコの煙がそこから流れ出したような気がしました。何も考えずに階段を駆け登って、小さくノックすると、あつきりドアが開きました。

(中略)

「タバコ吸ってたんだ？」

「おう。ひろった、んだ、前で。それで吸ったけ、ど味ねえや」

「お腹は？すいてない？」

「ああ腹はだいたいしょうぶ」

まるでそれは、福岡営業所で机を並べて残業していたときの会話の一部を切り取ってきたようで、私はなんとも言えない気持ちになりました。

なぜかと言うと、太っちゃんは三ヶ月前に死んでいたからです。(58頁)

「死んでいた」とその奇妙な状況の「背景」を早めに明かすことで、物語は、太っちゃんとの出会いから死別までのいきさつを語ることになる。その経緯が、客観性を帯びたそれよりもむしろ、語り手と太っちゃんとの間にある個人的な経緯と、太っちゃんにすら言わない「秘密」を語っているため、語り手の敬体が何者かへの「告白」のように感じられる点には注目しておいてよい。むしろ、このことは、敬体という文体の性質とも深く関係しているのだが、それ以上に、この物語が、「記録」が消去される物語、もしくは「記録」が「記憶」に置き換えられる物語であることと深く関係しているように思われる。この問題は、

後に詳細に検討することにしよう。

山梨出身の私も、茨城出身の太っちゃんも東京の大学を出て、住宅設備機器メーカーに就職しました。全国に拠点があることはもちろん知っていましたが、自分が九州に住むなんて一度も想像したことがありませんでした。同期の女性総合職も何人かいたのですが、彼女たちは東京と大阪に赴任することになっていました。(60頁)

東京の大学を出た二人の物語は、すぐに「大学出たてのテンションに戻ってしまう」(123頁) ような関係でありながらも、不思議なほど東京に起点(基点)をおいていない。むしろ、仕事の同期である二人の起点(基点)は、いくつかの「断絶」によって成り立っているとも言える。

一つは、就職後の赴任先が福岡になったことによる東京からの「断絶」である。これは、「東京」「大阪」という赴任先に象徴される、同姓同期の「総合職」との「断絶」でもある(1)。

福岡に慣れてくると、だんだん学生時代の友達とは話が合わなくなってきました。電話で話を聞いていても、東京しか知らないくせに、とか、現場を知らないくせに、とかそんなことに自分がこだわってしまうのです。学生のときに一緒に感じていたものって、なんだったんだろう、考えてもあまり思い出せなくなりました。世界が狭いようですが心置きなく話せるのは、やっぱり会社の人でした。(72頁)

就職以後の経験は、語り手に「学生時代」との断絶を意識せざる得ないものとして押し掛かり、そして異なる地方から赴任した営業職というポジションが、赴任先の事務職女性社員たちとの「断絶」意識を生む。

私は誰とでもそれなりに仲良くやっていたのですが、会社で苦手な場所が二ヶ所あって、それは更衣室と給湯室でした。事務職の女性たちはみんな感じ良く接してくれたのですが、でもやはり私はよそ者でした。(68頁)

ここで言われる「事務職」とはおそらく地元採用の女性たちではないかと思われる。中央や重点地域赴任の「総合職」、全国に配属される「営業職」、地元で採用される「事務職」という「区分」は、バブル時代、まだ学歴社会の雰囲気濃厚な頃においては、そのまま一流大卒、四大卒、短大（高）卒という学歴と重なる。

いわゆる「バブル世代」と一括されるこの世代は、一九八六（昭和六一）年に施行された「男女雇用機会均等法」以後に初めて社会に出た世代でもあり、バブル景気の時代に大幅にあがった売り手市場の中、女子大生の就職先も、これまでにはない分野にまで拡張した。転勤族としての「営業職」（「総合職」）に配属された語り手などは、その典型であったと言えるだろう。

むろん、この女性「事務職」が「給湯室」や「更衣室」という物理的空間においてその「連帯」を形成しているのは、表象イメージとしては、かなり典型的なステロタイプであるが、この物語では、その断絶を「方言」「標準語」の使い分けや、女性同士の空間に参入できない女性という位置から描いていることに、その特徴があるとも言えるだろう。

人事から配属地を告げられて、その後三週間の営業研修と工場実習の間、私は憂鬱でした。夜になって酒を飲みに行くとずいぶん荒れたものです。見知らぬ土地で、どうなるかわからない自分の運命が怖かったのだと思います。なんといっても福岡はライバル会社の本拠地ですし、私は男尊女卑の九州男児にいじめられるのだ、と勝手に思い込んでいました。（61頁）

ここでのライバル会社とは、「住宅設備機器」メーカーであることから考えて、TOTO株式会社（本社は北九州市小倉）であることは間違いない⁽²⁾。TOTOとライバル会社であることから、語り手の会社はINAX（現・LIXIL）であったと推測される⁽³⁾。この両者は、もともとは森村グループの同族会社であり、一九八五年に伊奈製陶株式会社は、コーポレートアイデンティティを実施して、INAXに商号変更しているが、この直後に入社した世代の物語であると言える。

そもそも、福岡は全国的にみても渇水の常襲地帯であり、一九七八年に発生

した福岡大渇水を契機として制定された節水条例に対応し、TOTOは、節水型トイレを開発し、後のトイレの標準仕様となってゆく。また、八〇年代には、ウォシュレットの開発とそのユニークなCMが効を奏して、大きなシェアを不動なものとしていった。

以後、同族内でのライバル会社として、トイレ、洗面器などは両者で全国シェア9割程度を押しながらも、TOTOの方がシェア60%以上で圧倒している。基本的に、TOTOの旧来依然の機能面における安心性・信頼性に対し、デザインやキットとしての導入のしやすさなどでシェアの開拓を狙っていたINAXであったが、二〇〇一年にINAXがトステムと経営統合するまでは、同族内での「競合的共存」とも言われる関係でもあった。この物語は、単なるバブル崩壊前後のみではなく、そうした業界の大きな変化の渦中を、末端の社員たちの目線から語ったものであったと言える。

初日は営業所の人たちに挨拶をして、たぐざんのカタログや見本が並んだ倉庫を見た後、本社から福岡までの旅費精算をしました。それから所長に営業カバンと福岡の道路地図を買って来るようにと言われて、地下鉄に乗って営業所から天神まで往復しました。（61頁）

この出勤初日の出来事に関して多くのことを語っているのは、一見、ただの冗長に見える。だが、この初日の出来事の内実よりむしろ、それを語る長さこそが、大切なのではないだろうか。むろん、それは言うまでもなく語り手の社会人としての経験にとつて、この日が起点（基点）として、最も重要であったことを意味している。だが、内実よりも形式的長さが重要であるとは如何なる事態なのか。これも後にもう少し詳細な検討を要すべき事項である。

六時を過ぎても、先輩の社員はみんな残業していました。けれど私たちはすることが何もなくて、本当はタバコが吸いたかったのですが生意気に見えそうなので我慢して、机もまだないので打ち合わせテーブルで分厚い総合カタログを見ました。衛生陶器やユニットバス、水栓金具の品番

はどれも長くて完璧に覚えることなど不可能に思えました。そもそも商品の見分けすらつきませんでした。一年先輩の副島さんが私たちのところに来て、おまえらもう帰っていいよ、と言いましたが、みんなが働いているのになんだか申し訳ないような気分でした。(62頁)

「タバコ」「住宅機器」「副島さん」と、物語に重要なモノと人が出揃い、これらのモノと人との関係の成長と変化がその後の物語の骨子となる。

「まっすぐ帰る?」

エレベーターの中で私は太っちゃんに聞きました。

「俺、さっき天神でよさげな店みつけたんだ」

「何屋?」

「なんでもありそうだったぜ。魚とかも」

太っちゃんと私は、未知の街に対する心細きと、社会人としての一日を無事終えた誇らしさとが入り交じった変な気分で乾杯をしましたが、ビールのお代わりをするころには二人ともすっかり自分らしくなって借り上げ住宅のワンルームマンションのことや、ゴールドデンウィークの帰省の話なんかをしていました。(63頁)

以後、語り手と太っちゃんという「同期」の関係は、仕事と飲みと「タバコ」を媒介に展開されてゆくことになるが、すべてはこの初出勤日から始まり、この初日の様な飲み会と喫煙が積み重ねられてゆくことになる。むろん、その日の当事者たちには、後に福岡を離れる日も、またその際の感情も、全く想像することは出来なかつたろう。後に語り手は言うことになる。

「最初の配属地って、多分特別だよな。」

3 語られる素朴な「連帯」あるいは周到なテキスト

福岡の食べ物がおいしいと言われていたのは本当でした。家庭料理は食

べたことがないのでわかりませんが、魚介だけでなく水炊きやもつ鍋や、焼き鳥屋の豚バラや東京よりずっと小さくてかりかりの餃子など、みんなで食べるおいしいものがたくさんありました。(中略) してみるみるうちに太り出して、ついに私の倍の体重になってしまいました。その頃、山崎さんか誰かが「牧原」と呼ぶのをやめて、あつという間にみんなが「太っちゃん」と呼ぶようになりました。(65頁)

語り手と太っちゃんは、九州という土地のイメージを「食」と「男尊女卑」のイメージで構築する典型的な東京中心主義の目線⁽⁴⁾を有しているが、そういった見知らぬ土地に東京出身の大学生が初めて総合職(営業職)として単身乗り込んでゆくとといった設定は、作者の一経験を超えて、「男女雇用機会均等法」以後に就職した学生たちに多く見られた光景であつたに違いない。

赴任して半年間、語り手と太っちゃんは、様々なことを学び社会人として成長してゆく。「搬入経路」「干渉」「クラック」など「現場」としての知識を「勉強会」や「先輩」から学ぶ過程は、それまでの「研修」と対置される。

本社の新人研修とは違って、「ここに気をつけなともめる」という点が強調されていましたが、その頃の私たちには「もめる」というのがどういうことなのかまだよくわかっていませんでした。(64頁)

そして、現場ではそういった諸問題を象徴する「もめる」という語が強調される。「もめる」ことにどう対応すべきか、またどう防ぐべきかという現場ならではの知識(実践)は、同期たちの各々の仕事への向き合い方に繋がる一方で、連帯感にも繋がる。

太っちゃんと私は一度も喧嘩をしたことはありません。仕事の仕方はまるで違っていました。気が合うのです。(72頁)

二人は「気が合う」ことを除いて基本的に仕事への向き合い方は逆であったともいえる。その典型例として、「もめる」ことに対する感覚が対照的に描か

れているのだ。語り手は、「勘で仕事をするタイプ」でありながら、「ここはもめそうだ」という「におい」に敏感であった。ところが、太っちゃんのそういった感覚はかなり鈍い方であった。

太っちゃんの場合は、そういう、もめる現場においてなんでものは感じないようでした。この現場気をつけた方がいいよ、と私が言っても、そうかあ、と相手にもせず、はらはらしているうちにやはり欠品だの設計ミスだのとかが起きてしまうのです。
(73頁)

だが、程度の差はあるものの、すべての「現場」から「におい」を感じ取ることなどは誰にも出来ない。むしろ、この物語における「仕事」の「現場」とは「もめる」事を收拾する場所であったと言ってもよい。その意味で、副島さんが語り手にかけて「納まらない現場っていうのは絶対にないんだよ」という言葉の意義は非常に大きなものであつたらう。

太っちゃんが一番弱つたのは、大型物件でも偉い人の邸宅でもなく、天神の雑居ビルの改装で納入した隅付きロータックBBT・14802Cと和風便器4AC・9のセットでした。年度末で需要が集まるときでもあり、たかが便器一台の納期がなかなか出ませんでした。
(74頁)

このエピソードは、太っちゃんの最も「もめた」例として語られたものである。喜劇的で笑えるエピソードとして描かれる場面である一方、この「BBT・14802C」という型番は、後の話の伏線となっている。一見冗長に見えながら、実は、人物の設定、状況の説明と、細かい点に至るまで無駄のないテクストなのである。

他にも、新しいOSによるシステムの電算化や、「違算」の「伝票処理」による残業の苦勞などが描かれるが、テクストにおけるこうした仕事の苦勞話が、読者にとっては、語り手と太っちゃんとの間にある共通の思い出として理解される仕組みになっている。

太っちゃんは大学時代から車の運転をしていたので、すんなり営業車の運転を任せましたが、私はペーパードライバーだったので、助手席に座った副島さんからは、ずいぶん怖い思いをしたと後でさんざん問かきまされた。
(65頁)

こうした一見なんでもないようなエピソードも、後に展開される二人の「連帯感」を最も象徴するエピソードと繋がっている。

インフルエンザで四十度近い熱を出した太っちゃんが、七十キロ離れた伊万里の現場まで行くとき、運転をしていたのは私でした。会社の裏の内科で点滴を打ってもらって一瞬ハイになった太っちゃんは、もう大丈夫だからいいよそんな、と言ったのですが、私は予定をキャンセルしたんだから、と言って譲りませんでした。
(79頁)

このエピソードの終盤に語られる「仕事のことだったら、そいつのために何だつてしてやる。／同期ってそんなものじゃないか」という独白における「何だつて」という言葉の意味は、先のペーパードライバーだった就職直後の語り手の状況を踏まえてこそ意味をなしてくるのである。

太っちゃんは前から欲しかった二人乗りのシーカヤックを今度のボーナスで買うお許しが出たと言いました。そんなん車に載るの、と聞くと、ちゃんと寸法あつたから大丈夫、と太っちゃんは言いました。私たちがするのは、そんなたわいもない話ばかりでした。
(79頁)

語り手の仕事の終了を傍で夜中まで待っていてくれた太っちゃんとのオフィスでの飲みの場面も、そう考えると彼女らのささやかな連帯感を描いているように見えながらも、実は何かの伏線であるのではないか。実際に、東京での再会時に、再びこの話題が上げられているのは、無駄のない戦略的なテクストにおいて、ただの偶然であるとは思えない。

4 機能としてのキャラクターあるいは「同期」を語るテキスト

そんな太っちゃんを選んだのが設備商品のベテランの事務職である井口珠恵さんでした。課長やメンテナンスの人でも、わからないことがあると工場ではなくて井口さんに聞くのです。井口さんは昔の商品や、クレームの履歴なんかでもとてもよく知っていて、何か聞かれても考え込むということがないようでした。(66頁)

井口さんは、女性の事務職員である。前述したように、物語の同姓社員の内には、地元の事務職員と赴任してくる「営業職」(総合職)との対立構造があり、その意味では「苦手な」あるいは「怖い」同姓社員であったが、一方の仕事上の頼れる先輩でもあった。

「所長がそげんこと言いよんしやったとお？」と盛り上がっているところに私が入っていくと、みんな笑顔でお疲れさまですと言ってくれるのですが、その後の言葉は、「もう福岡には慣れましたか？」という完璧な標準語なのでした。

井口さんみたいなベテランの人でも、会社を辞めるまでは決して丁寧語を崩してくれませんでした。山梨で育った私が付け焼き刃でみんなと同じ博多弁が喋れるはずもありません。自分の机がある島では、結構口の悪いことを言っているはずの自分が、更衣室と給湯室ではいつも旅行者みたいな気分になるのでした。(68頁)

こうした地域や職種の「壁」を象徴するのが「方言」と「標準語」という対立であることは前述したが、太っちゃんの結婚を介して、井口さんへの理解を深めてゆき、他の女性事務員とは異なった信頼関係を構築してゆく。

井口さんはほんとうに惜しまれて、けれどさばさばとした調子で会社を辞めました。でもその後も、転勤してしまった課長や辞めてしまった先輩が采福するときには、大きなお腹を抱えて出てきてくれました。私たちは

つまでも井口さんのことを覚えていたし、頼りない新人が入ってくるたびに、井口さんならびしびし指導してくれたのにな、と思いました。(71頁)

しかしながら、語り手と井口さんは、物語の中ではあくまで対立的な位置でもある。社内恋愛から結婚、妊娠、そして惜しまれつつ辞めるという物語は、当時の女性事務職にとつて典型的なルートであったと言ってもよい。また、首都圏から地方に赴任した社員が社内恋愛により地元採用の女性と結婚し専業主婦となるという物語は、「寿退社」「永久就職」という形で、まだ終身雇用性への信頼が厚かった時代の企業や家族制度を支えていたとも言える。

もちろん、井口さんの様なケースは、もともと以前から存在していた。しかし、「男女雇用機会均等法」に加えバブル期の売り手市場の中、様々な「現場」に進出してゆく語り手のような女性たちにとって、先例となるべきものは存在していなかった。語り手たちのような女性たちにとって、キャリアの継続が意味するものは、井口さんとは異なる人生設計であった。

福岡に慣れてくると、だんだん学生時代の友達とは話が合わなくなってきました。電話で話を聞いていても、東京しか知らないせいで、とか、現場を知らないせいで、とかそんなことに自分がこだわってしまうのです。学生のように一緒に感じていたものって、なんだったんだろう、考えてもあまり思い出せなくなりました。世界が狭いようですが心置きなく話せるのは、やっぱり会社の人でした。(72頁)

「学生時代の友達」との断絶と入れ替わるように成り立つ会社の人の中で、同じ女性社員についての事務職、同じ営業職内での先輩といった対比構造によって、太っちゃんとの関係が明瞭となる。さらに、同じ女性の中で、太っちゃんを媒介として、井口さんと語り手の対比構造をとらえることで、物語上の人物たちの位置が明確になってくる。そうした否定神学的な対比の末に浮かび上がってくる関係こそが、「同期」という意識なのである。

助手席に収まった太っちゃんは、いつものように軽口をたたきました。

「さては俺に惚れたな」

「ばか。誰が惚れるか」

けれど今宿を過ぎるころには、太っちゃんは車に積みっぱなしにしていた現場用のジャンパーを着込んでぶるぶる震えていました。

「悪いな」

震えながら太っちゃんが言いました。

「惚れても無駄だよ」

私が言うのと太っちゃんは口の端だけで笑ったようでした。

(80頁)

二人の会話に多いこうしたパターンには、常に恋愛関係とは対極にあるという意識がある。「仕事のことだったら、そいつのために何だっしてやる」といった語り手の意識は、同じ仕事の苦勞を共有した連帯感が背景にあり、そして同じ東京出身者として同時に入社着任した「同期」という意識がある。

その意味で、井口さんと太っちゃん、そして語り手という三人の関係は、「恋愛」を媒介にした三角関係ではない。「信頼」「愛情」「同期」という絆でしっかりと結ばれていた独特な関係性であった。

5 記録される「記憶」あるいは「記憶」するテキスト

後に語り手は、副島さんに続きさいたま市の同地に転勤し、数年の時を経て太っちゃんと再会することになる。再会の際は、断絶された地「東京」であった。二人の再会は、東京での「食いもん」の「旨さ」から始まるが、既に「太っちゃん」と「食」の関係を十分に印象付けられた読者には、自然な展開に映る。そして「東京」という土地は、これまでの「福岡」との対比で語られることになる。

「東京ってどう？」

「営業車がないから不便なんだ。工具持ち歩けないし、昼寝もできねえや」

「埼玉は営業車はあるけど、事務所の喫煙スペースが狭いんだよね」

「でも、なんかあれだな。最初の配属地って右も左もわかんねえころから

いるから、女の子とかも気のおけない感じがするけど、俺みたいにこの年になって東京に来ると、お互い遠慮してる。女の子だけじゃないな、営業マンでもそうだ」

(84頁)

ここで二人に語られているのは、「車」「喫煙」「周囲との連帯」とすべて「福岡」との比較によるものであり、ようやく出身大学の周辺に戻って来た二人を結びつけるのは、断絶された「福岡」の地の記憶になっている。「営業車」が無いことや「喫煙スペースの狭さ」、さらには他の社員との拭えない距離感などという話題の共感は、今ここにはないものとして同じ時間と空間を共有した二人だからこそのものであるのだが、同時にこうした断絶の地への追憶は、われわれ読者も含めて共有ながらも決して一致することがない点において「記憶」となりつつあるとも言える。

むしろ、物語として語られる時点であらゆる「記憶」は「記録」化されている面があることは言うまでもないのだが、実は、このテキストは、「記憶」から「記録」という一方向の変化を取り上げているわけではないことが重要なのである。

「太っちゃん、シーカヤックどうした？」

「東京湾に浮かべるわけにいかないから、福岡にほったらかしさ」

そこまではどこの飲み屋でもやってるような、典型的な三十代の会話で

(85頁)

「典型的な三十代の会話」という語り手の表出に嘘はないかもしれない。しかし、これまでも確認してきたように、何気ない会話や話題は、実は周到に構成されており、それが語り手と太っちゃんとの個人的な「記憶」を我々が共有する幻想を持つことを可能にしている。ここで喚起された「シーカヤック」の記憶も、作中人物のみではなく、我々にとっても既に一度語られた彼女たちの記録であり、この時点で既にある種の「記録」＝「物語」化の変容をなしている。

「おい、おまえこの計画乗るのか、どうなんだよ」

「いいけど、太っちゃんに見られちゃうんでしょ。それがやだな」

「だからそのための協約なんだって。珠恵さんとかだったら絶対パソコンの机身全部見るよ。俺わかるもん。おまえの、いるかいなかわかんねえ。彼氏とかでも見るよ。だって、そういう人は何でも知りたがるから。でもおまえだったら見ないって約束したら見ないでいてくれるような気がするのよ」

「確かにね。太っちゃんが持つてる変態エロ写真とか見たくないかも」

「動画じゃ、ほっとけ」

「あはは」

「でも、だから成立するんじゃないかな。どっちが先に死んでも見ない。でも壊す」

(90頁)

再会の飲み会の終盤で、まるで本題であるかのように「ハードディスク」の件を持ち出す。それは、死去した際、お互いのHDDの机身を物理的に破壊するという「協約」だった。また、この「協約」はお互いのデータを見ないという信頼のもとになされた不思議な契約でもあった。二人の会話からは、データを見せたくない相手として、妻や恋人などが想定されていることが、そういった男女の関係に對置された「同期」としての関係を際立たせている。

当時(二〇〇五年)では、クラウドサービスはもろろんのこと、まだパソコン用のブルーレイは市販化されておらず、容量が限られアクセス速度も遅いMOやCDなどの外部記憶装置よりも、HDDに對する依存度は大きかった。また、一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて、MRヘッド、GMRヘッド、TMRヘッドなどが開発され急速に記録密度が増加し、アクセス時間に影響する回転速度も一九九〇年代中頃から7200rpmが主流となり、現在に至っている。二〇〇五年時点では、高回転のものとしては、15000rpm (Maxtor製のAtlas 15K12 SAS) などのも商品化され、HDDとしてのテクノロジーはかなりの発展を遂げていた⁽⁹¹⁾。

「でき、俺が興味持つてるのはね、弁当箱の中が真空に近いってことなのさ」

「真空？真空なんて存在するの？」

「だから、ほぼってことだよ。完璧じゃない。でもき、密閉されたパッケージを開けたら当然空気入るだろ。シュツっていうか、パコッっていうかわからないけど、それってすごくよくないか？」

「真空に入る空気の音ねえ」

そう言われてもあまり実感がわきませんでした。

(89頁)

太っちゃんが何故、HDDの真空に拘るのか。テキストは最後まで明かそうとはしない。しかし、ここで語られる「真空に入る空気の音」とは、そこに記録されるものが消え去ってゆく音に他ならなかった。我々の中にも「真空」の中に入り込む「空気」というイメージだけが残る。後に星形ドライバーを受け取った語り手は、こうつぶやく。

星形ドライバーを手にとってじっくり眺めました。先端の形状以外は、ふつうのドライバーセットとなんの変わりもありません。

けれど。

これ一本で、私の記録が消える。

(93頁)

そういった意味でこの物語は「記録」を消した物語(記録)あると言える。結果的に語り手が太っちゃんの「記録」を消すことになるとは予想もつかなかったことであるが、それを「何か起きる現場において」など一切なかったと語れるとき、また以下の様な比喻で語られるとき、我々は既に物語の中に引き込まれている。

なぜかそのときは、私の方が早死にするという予感があったのです。納まらない現場がないように、死なない人はいないのですが、私という現場は太っちゃんという現場よりもずっと竣工が早いような気がしたのです。

以下に続く、副島さんから太っちゃんの死を聞かされる場面でも両者を媒介

するのは「タバコ」だった。

「なぜだ」

と、副島さんは大きくタバコの煙を吐いて言いました。

「あんなに、クッションが効いてたのに」

私はその言葉を聞いて、会社で初めて泣きました。

(94頁)

そして、今まで揶揄として繰り返されてきた身体的特徴が、悲しみを実感させる一言として語り手に突き刺さる。こうした感動は、語り手によって巧みに構築された構造を我々が再構築することによってなされていることは言うまでも無い。だとすれば、ここでおこっている感情の機微も、語り手の「記録」の再現であるといえる。しかし、それは、このテキストが「記録」であるという前提の下でしか成り立たない。だとすれば、このテキストは、どういった意味で「記録」なのであろうか。

真空に空気の入り込む音なんてしませんでした。プスツともシュツともいいませんでした。

太っちゃんのおそつき！

けれど太っちゃんはどうもいないのです。どこかの病院の地下で横たわっている身体はまだこの世に存在していても、もう二度と太っちゃんを罵ることができないのです。また頭がぼうっとしてきました。「弁当箱」のブタは僅かに歪んですき間が出来たのですが、どうしても開きません。やみくもにマイナスをあちこちに差し込んでこじっているうちに、あることが浮かんで離れなくなりました。

これは、太っちゃんの棺桶だ。

(100頁)

HDDの形状を「弁当箱」と見立てるのは、いかにも太っちゃんから来る連想としては自然であるが、大食漢の太っちゃんの肉体は既に現実にはない。そして、眼前の弁当箱は、太っちゃんの「記録」を封じ込める「棺桶」となる。この「記録」は、太っちゃんの唯一の生存の証ではなかったか。だが、語り手

は、それを破壊しようとする「冒涇」を止めない。それが「同期」との「協約」であり「仕事」だったからだ。

中には銀色の鏡のような円盤が入っていました。鋭く刺すように光を反射する、静まりかえった円盤でした。

これが、死なんだ。

と思いました。すべてを拒否するように眩しかったからです。

(101頁)

消して再現されることのない記録。それは、すべての解釈を拒否する記録である。生が記録を綴る主体あるいは他者の記憶を構築し続ける主体であるならば、死とは綴られた記録が全て他者に委ねられることあるいは全てが他者の記憶として委ねられることである。その意味で「円盤」を傷つけると語り手の行為は、死からの救済とも死への完遂とも言える。

営業車に戻って、エンジンをかけながらこの鍵をどうしようかと迷いましたが、十分現場から遠ざかってから、コンビニに寄ってトイレを借りて、隣付きロータリーのブタを開けて水中に落としました。どのコンビニか、私は死んでも言いませんが、内部金具の交換でもない限り、あの鍵は今でもあそこにあるはず。太っちゃんがさんざんもめた、あの和便と同じセットのBBT・14802Cのロータリーの底に。

(104頁)

「協約」をめぐる物語は、「BBT・14802C」という伏線の解消とともに閉じられる。そして、この物語を開ける「鍵」は、半永久的にロータリーの底に閉じこまれたままである。

さいたまに帰ってからの私の生活は何も変わりませんでした。現場にすつとんで行って謝り、売値率ぎりぎりの見積りを出し、本部方針にたつき、副島さんと喫煙所ではか話をしました。

(115頁)

そして、福岡の物語を語る埼玉という場も、語り手の浜松への転勤という「断

「絶」によって入れ子状に相対化されてゆく。しかし、そんな埼玉での生活を象徴するのもまた「現場」とタバコ（喫煙所）であった。今後、どこに転勤となっても、同じ職場に居る限り、同様に象徴化される日々が続いてゆくのだろう。

いつも思っていたのです。

このメンバーで飲むことは最後かもしれない。

半年たてば誰かが転勤し、また誰かがやって来る。イレギュラーな転勤だつてある。どこが最後かなんてわからない。一つの場所に一年しかないかもしれないし、十年いるかもしれない。

でも、それが生きた組織だと思っていたのです。

(116頁)

語り手は、既にその事実を「生きた組織」という言葉で充分すぎるほど認識している。だが、どの土地の生活も同様に象徴化してしまうこの諦観は、逆説的に最初の地である「福岡」を絶対化するのだ。そう、やはりこの物語は、「起点」をめぐる物語であった。

二人の「同期」としての「記憶」は、本来共認不可能なそれである。だが、この語り手は、それを様々な技巧を凝らし「物語」という形に「翻訳」した。物語が「翻訳」である以上それは「共認」であり、純粹な「経験」に近い「記憶」とは異なる。しかしながら、我々にとって共感できる他者の「記憶」とは「共認」された物語以外にあり得ない。

6 記憶される「記録」あるいは宛先のない「テキスト」

しかし、語り手の「記憶」を消す「仕事」は完遂され得なかった。

珠恵よ

おまえは大きなヒナゲシだ

いつも明るく輝いている

抱きしめてやりたいよ

消去されることなく残された言葉は詩であった。「ヒナゲシ」(「虞美人草」)は、東西問わず「恋」にまつわる伝承を持つ花である。

夕暮れおまえのことを思いだす

夕陽は九州に向かって沈んでいく

珠恵 珠恵 珠恵

夜になつてもさびしがるなよ

俺の心はおまえのものだから

「九州」を日が沈む方向としてうたう主体は、何処にいるのだろうか。これが、九州に残されたノートにある詩であることから、東京に単身赴任した後に書かれたものである可能性は低い。だが、九州を夕陽の沈む方角ととらえる主体は、明らかに九州を海の向こうと捉えている。

俺は沖で待つ

小さな船でおまえがやって来るのを

俺は大船だ

なにも怖くないぞ

「沖で待つ」対象は、紛れもなく愛妻「珠恵」であり、「待つ」主体は、海上に居る「船」であるという。あの「シーカヤック」は「東京湾で浮かべるわけにはゆか」ず、九州に置きざりにされたままであったように、愛妻への想いを綴った詩歌(記録)のみが、妻のもとに残された。二人乗りの「シーカヤック」が、太っちゃんと愛妻のものであったように、乗せるべき相手の居ない船は、常に妻の事を慕いつつ「沖で待つ」ている。

むろん、こういった死を予感していたかのような解釈が無効であることは、語り手自身も述べている。だが、この詩の一節は、小説全体のタイトルでもある。本編とはさほど関係がないにもかかわらず二度にもわたって語られる「シーカヤック」の挿話によって、我々は、それを自然に沖で待つ「船」に結び付けてしまう。もちろん、それを「誤読」であるというのはたやすい。

だが、少なくとも物語自体は、そのミス・リーディングを誘っている。なぜならば、「沖で待つ」という言葉を妙に心に残している語り手によって構築された物語であるからだ。

私がそれを言うか言うまいかと思っていたのを察したかのように太っちゃん口をひらきました。

「家に忘れてたノートがあったとは迂闊だった、よな」
太っちゃんはちよつと笑って、その間にしゃっくりがはまりました。

(117頁)

幽霊となった太っちゃんの言葉は「しゃっくり」によって遮られる。これをフロイトの「言い間違い」や「言い激み」をめぐる概念を援用し、真に大切な何かを語ろうとした瞬間と捉えることも出来るだろう。その大切な何かとは、実は至極平凡な思い出であるが、迂遠の末最後にようやくたどり着いたことは、起点としての出勤初日の思い出であった、と解釈出来るからだ。

だが、「* *」以降も決して物語の「外部」ではないのだ。二人の最後の場面にあるものは、やはり「タバコ」である。それも、食欲(味覚)は失ってもタバコは最後まで残ったのである。物語では「タバコ」とは、仕事の象徴であり、同期や先輩といった仕事仲間の空間を象徴するものであった。技巧的な語りは、テキスト全体を覆っているのだ。

物語構造の問題として考えた時、「しゃっくり」により失われつつあったのは、言葉話す主体としての太っちゃん、あるいは太っちゃんから発せられる言葉そのものであったように思われる。HDDの破壊によって失われたものが太っちゃんの記録であるのだとしたら、現前する太っちゃんは、発話を失いかけた主体である。「真空」のHDDにあいた穴から空気が流れ込む予想は、太っちゃんへの妄想であったかもしれないが、幽霊となった太っちゃんの穴(口)からは、何かが吸い込まれ、発話を妨害してゆく。

息が詰まるようでした。声の響きが失われ、なんだか真空ってこういうことじゃないか、という思いが頭をかすめました。

(119頁)

この場面で「真空」という語彙が使われていることは、偶然ではない。それでは「こういうこと」という指示語の内容を説明出来ないからだ。

主体を失った発話は、ただ解釈されるしかない。発話を受け取った多くの人々は、それぞれの恣意(解釈)によって言葉の運動を止めてしまおう。他者の言葉を永遠に続く解釈の流れにさらし続けることの出来る人間など滅多に存在しない。実は「記憶」とは、解釈から疎外された言葉なのかもしれない。

だが、発話が常に主体によって変容され続けるのは、実は本当は何も伝わらなかったのを知っているからなのではないだろうか。HDDの中身が真空ですらなわけではないか。

そういった意味で二人の最後の会話は、恐らく何かを伝達しているのではない。

「及川も考えといた方がいいぜ。おまえ、のHDDやばいよ」

「なんで？太っちゃん知ってるの」

「いつの間にか知っていた」

太っちゃんはそう言っただけ息をつきました。

「『観察日記』、あれ人に見、られたら大変じゃねえか」

「うん」

相手が幽霊とはいえ、それを言われるのは心底恥ずかしかったです。私は、向かいのマンションに住む男性の部屋を覗くことを習慣にしていた、それを観察日記と称して記録していたのですから。(117頁)

『観察日記』が如何なるものか、このテキストは語らない。だが、お互いのHDDの中身は、異性関係のものとしては共通した点を有しており、それを異性関係の対極にある「同期」がお互いの死後に破壊するという協約をめぐる物語として、テキストは最後まで確固たる構造性を有している。

「楽しいのに不思議と恋愛には発展しねえんだよな」

「するわけないよ。お互いのみつともないとこみんな知ってるんだから」
でもさあ、夏目は石川とやったらしいよ、と言いかけてやめました。たとえ

相手が死んでいたって秘密は秘密です。死んでも同期は同期なのですから。「だよなあ。冷静に考えたらおまえだっていい年なんだけど、おまえと会うと大学出たてのテンションになっちゃうよな」

「何も変わらないような気がしちゃうよね」

太っちゃんは満足そうに頷きました。

しゃっくりが止まったことに、私は気がついていました。カウントダウンされていく残り時間のイメージが湧いて私は早口になりました。

最後まで繰り返される「恋愛」関係と「同期」関係の対比。だが、夏目と石川という挿話は、こうした「恋愛」と対比される関係が必ずしも、あらゆる「同期」という関係を普遍化するものではないことも示している。「同期」という関係性もまた、永遠に共訳不可能性にされ続けられる。

「覚えてる？最初に福岡に行ったときのこと」

「おう。覚えてるよ」

それなら何も言い足すことはありませんでした。

(124頁)

こうして二人の最後の時間は終焉を迎えようとしている。そして語り手は二人の中の「福岡の景色」をこう述べる。

私たちの中には、あの日の福岡の同じ景色が、営業カバンを買いに行けと言われて行った天神コアの前で不安を押し隠すことも出来ず黙って立ちつくしていたイメージがずっとあって、それが私たちの原点で、そんなことは今後も、ほかの誰にもわかってもらえなくてもよかったです。

「原点」という言葉の意味を我々は全くもしくは僅かしか共有し得ない。いや、むしろ、テキストは、「誰にもかわってもらえなくてもよかった」と語る。こうした共訳不可能性としての言葉として「同期」という語彙も召喚される。だからこそ、残り少ない時間で彼女たちがなそうとしたことは、何かの「伝達」

ではなく二人が「起点」を共有した「同期」であったという「確認」だったのである。

ならば、このテキストは、言葉や経験の共訳不可能性を問題にしているのだろうか。そうとも言えるだろう。だが、そうだとすれば、なぜ太っちゃんは詩を「記録」したのか。なぜ語り手は観察日記を「記録」したのか。そして、このテキストは誰に向かって残された「記録」なのだろうか。

「記憶」は主体の喪失とともに消え行く。「記憶」を共有することは出来ない。コミュニケーションにおいて可能なのは、「記憶」の存在の確認だけである。確認され得るのは、「記憶」の存在であって、「記憶」自体ではない。我々の持つ「記憶」とはあくまでも各自に事後的に内在化されたものである。

「記憶」は表象化あるいは「記録」されることによって始めて外在化される。だが、外在化された「記憶」は、解釈にさらされることによって常に誤読の連鎖に曝される。その誤読の連鎖に僅かに抵抗しうるのは、現前し表象する主体と表象されたもののみである。だが、誤読を伴わない外在化はあり得ない、そうすることによって始めて我々は共訳の可能性を垣間見る。だが、むしろこの可能性自体も誤読である。

こうした状況を悲観的な記号学者であれば、我々は言語の外部には出られない、などとシニカルな態度を決め込むであろう。だが、改めて考えてみれば、「伝わる」とは、コミュニケーション後の双方に生じた現象に過ぎないのではないだろうか。たとえ、異なった理解が双方にあったとしても、「伝わった」という実感をもなった関係自体は、そうでない状態と何が異なるのだろうか。

だからこそ人は「記録」し続けるのである。「記録」というコミュニケーションは、常に開かれている。誤読にも解釈される相手にも開かれている。

もしかしたら、この物語自体が、語り手のHDDに残されたものなのかもしれない。だが、そうだとしても、それは誰かに向かって何かを語るために残されたものではない。太っちゃんが自分の詩を死後に消去しようとしたように、彼の詩(記録)は愛妻という宛先に向かって何かをうたおうとしたものではない。偶然残ってしまったつたない詩(記録)から伝わったものが、愛情の内実であるならば、それは永遠の誤読である。だが、この記録は、妻に愛していた主体

の「記憶」を生みだし続けるだろう。
それは、宛先のない告白の語りに対し、偶然その宛先となってしまった我々の体験でもあった。

註

○テキスト本文の引用箇所は、初出誌と文庫本の間には大きな改訂はない。よって引用頁は、文庫文庫『沖で待つ』（二〇〇九年二月）からのもので統一してある。

(1) テキストにおける、語り手や太っちゃんの職種は「総合職」に思われるが、実際の内実は「営業職」であろう。だが、テキスト内では両者の識別をしておらず、「営業職」を含む形での「総合職」が「事務職」と対比される形になっている。

(2) TOTOについては、主として、東陶機器株式会社編『東陶機器七十年史』（一九八八年五月）を参照。他に、前田裕子「日本における衛生陶器の工業化——水洗トイレの産業史」〔神戸大学経済経営学会『国民経済雑誌』188巻2号、二〇〇三年八月〕は、衛生陶器の歴史を探る上で有効な論文である。

(3) 両者はそれぞれ企業博物館を所有。TOTOは、TOTOミュージアム（北九州市小倉北区）INAは、INAXライブミュージアム（愛知県常滑市）。また、INAについての文献としては『伊奈製陶株式会社30年史』（伊奈製陶、一九五六年）といったものも参照した。

(4) 水炊きは、当時「博多煮」と言われ、長崎の林田平三郎が一九〇五年に完成させたものと言われている。寒北斗は、一九八四年に生まれた地酒。また、中洲の餃子は一九四九年創業の宝雲亭に起源があると言われている。こうした「起源」には諸説あったとしても、戦後の福岡の食表象のイメージは、戦後早い時期にはほぼ確定していたと思われる。

(5) データ記録用ブルーレイが市販化されたのは二〇〇六（平成一八年）年のパナソニックLF-MB12JD。ハードディスクの代替としてのSSD内臓パソコンがソニーにより市販化（VAIO typeU）されたのも同年のことである。